

# 凶南丸・笠戸丸

香田 武

昭和十九年八月二十二日午後七時五十分。なんの前触れもなく突然私の腹にずすと響く強烈な爆発音。途端におびただしい海水に呑み込まれ、どのくらい時間がたったのか検討もつかない。気がつくとき暗い洋上に浮いていました。アメリカ軍の魚雷を受けのた。星のまたたく洋上で、ふと母の顔が浮ぶ。その時、はるか遠く、私の乗っていた凶南丸が赤い炎につつまれ、まるで泣いているように見え、悲しく涙が出る。やがて凶南丸は暗く深い海中へ消へていきま

ました。  
私と同じような人たちがあちらこ

ちらと泳いでいる姿に気づく。一緒に洋上に漂っていました。時間の感覚がないまま夜明前、日本海軍の海防艦に発見され佐世保へ。上官より凶南丸の沈んだことは口外してはならないとのこと。明るくなって分かったことは、凶南丸につみ込まれた二万トンの重油が流れだし、その中を私たちは浮いていました。そのため、顔から手足まで重油で真っ黒。誰が誰だかまったく判りませんでした。

顔と手足の皮がきれいになるまで、佐世保の勝富町という色町に足止され、九月半ばに、やっと私のふ

る里広島に帰り着きました。母の喜ぶ姿が今でも思い出します。二カ月後の十一月始め、移民船で有名な笠戸丸に因島で乗船。しかし、知らぬ船に乗っているのがイヤで六月に下船、笠戸丸はカラフトに行く予定だった。その後、第十二共同丸に乗船していた八月六日、広島に新型爆弾が投下されたと聞き、広島にいる父母の事が気になり、八月十七日、広島に帰る。赤ちゃんから年寄りまで、ひどすぎると思いました。

私の気にかかるのは笠戸丸の人たち、今でも忘れません。笠戸丸はもともと、ソ連の船で、日口戦争後日本の船となった。